

## 文献紹介

ジャン＝ロベール・ピット著、高橋伸夫・手塚章  
訳：『フランス文化と風景 上・下』

東洋書林 1998年7月

四六判 264・256ページ 各2800円

風景(ないし景觀)は、いうまでもなく地理学における重要な基本的概念のひとつであり、今日では地理学の枠をこえた多様な立場から、景觀をめぐって活発な議論が展開されている。原題を『フランス風景史』(1983年刊)とする本書は、フランス地理学の伝統をふまえ、先史時代から現代まで、フランスの景觀がどのような過程を経て形成されてきたのかを考察している。

著者のピット氏は、現在パリ＝ソルボンヌ大学副学長の任にあるとともに、フランス地理学会会長を務め、名実ともにフランス地理学を代表する研究者の一人である。歴史学と密接な関係をもって育まれてきたフランス地理学の性格を受け継ぎ、歴史や文化を重視するその研究手法は、本書の随所に活かされている。

構成は、序章「景觀論の諸相」の後、時間軸に沿う形で第I部から第III部までが配列され、第II部の途中までが上巻、残りが下巻に収められている(なお、訳書では巻ごとに部の番号が付されているが、本紹介では便宜上通し番号とした)。序章では、景觀概念をめぐる従来の学説を検討し、自然景觀や農村景觀への偏重がみられることを指摘している。そうした状況に対し、著者は景觀を「現実の文化的複合体」と定義し、歴史的な変化の過程の中でのみ理解しうるものであると主張している。景觀を「人間の自由な営みの表現」とする見方は、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ以来のフランス地理学の伝統にのっとったものであり、本書を貫く基本的な姿勢である。

第I部「森林の時代からローマ帝国へ」は4章からなり、先史時代からガロ＝ロマン期まで(およそ紀元3世紀まで)をとりあげている。先史時代の自然環境の変化から始まり、初期の耕地の出現から独立期ガリアにおける農村・都市の形成、さらにその後のローマ都市の成立やローマの影響をうけた農村景觀の形態などが扱われている。ここでは、近年における発掘調査の結果や空中写真を用いた研究成果が十分に活用されている。また、ギリシアやローマの影響を選択的に吸収して

いったケルト人・ガリア人の役割に注目している点が興味深い。

続く7章からなる第II部「実用主義の時代」では、ゲルマン民族の移動からナポレオンの第一帝政期に至る約1500年間について検討が加えられている。中世の農村に関しては開放耕地・ボカージュ(生け垣)の成立や建造物の変容、都市に関しては古代都市との連関といった点について分析がなされている。ルネサンス期以降になると、都市においては宗教的要素が後退し、視覚を重要視するフランス式の建築や都市計画が登場する。一方、農村においては、農業の専門分化の進展や共同体的景觀の衰退がみられるようになる。著者の学位論文が栗栽培についての研究であったことにも明らかのように、とりわけ農村景觀の変容過程に関する記述は、詳細かつ理解しやすい。豊富な事例研究を組み合わせて考察する著者の力量もさることながら、それを可能にしているフランスの歴史地理学研究の厚みを感じさせる部分である。

最後の第III部「工業の様式」は3章構成であり、19世紀の産業革命期以降を対象としている。19世紀に関しては、農村における商品作物生産の進展やオスマン(G.E.Haussmann)によるパリ改造がとりあげられ、20世紀に入ると景觀の均質化が進行したことが説明されている。第二次世界大戦後、都市計画家や建築家が「合理主義」的な都市景觀を生み出してきたことについて著者は批判的であり、技術に対する芸術の復権を主張している。そして、特徴的な景觀だけを分離して保護するのではなく、国土全体で開発と保全の均衡を保つことを提言している。営々と積み重ねられてきた歴史をふまえた著者の主張は、ともすれば理念が先走りがちな近年の景觀保全の風潮とは一線を画しており、傾聴に値する。ただし、この第III部のうち20世紀を扱った最終章は、それまでの部分に比べて、景觀の中で生活する人々の姿がやや見えにくい記述となっている。もっとも、その原因の一端は、合理化がおしすすめられてきた20世紀の景觀そのものの性格に求められるべきであろう。

景觀が可視的であるという点で、建造物の材料をはじめ具体的なモノを通して論が進められることは、本書全体を通じた特色のひとつである。42

枚の図と57枚の写真は、ときに本文以上に時代ごとの景観の特徴を如実にあらわしており、それ自体が高い価値を有している。欲をいえば、これらの図や写真がフランスのどの地点のものであるのかを示すような図があると、フランスの地名に疎い一般的な日本の読者の理解もより深まったと思われる。

日本と同様に、フランスにおいても、景観・風景はきわめて今日的な課題となっている。該博な知識に基づいた本書が、アカデミー＝フランセーズ賞（歴史部門）・フランス環境庁賞・フランス地理学会賞といった数々の賞をうけたのもうなずけることである。

訳者である高橋・手塚両氏は、共同調査・共同執筆の機会を通じて著者と親交があり、フランスの事情にも明るい。その結果として、読みやすい翻訳になっており、訳書としての本書の価値を高めている。今後、フランスやヨーロッパの歴史地理をとりあげる場合、本書はまず欠かすことのできない文献である。また、日本における景観論、あるいは歴史地理学や文化地理学を考える上でも大いに参考となる。さらに、読者の視点によってさまざまな読みとり方が可能な本書は、地理学にとどまらず、幅広い分野から注目を集めることになろう（その一証左として、1998年11月のNHK衛星放送「週刊ブックレビュー」において本書が紹介されたことを付言しておく）。

（三木一彦）

#### 知井村史編集委員会編

##### 『京都・美山町 知井村史』

知井村史刊行委員会、1998年3月、

B5判 340ページ 定価3000円（税・送料を含む）

旧京都府北桑田郡知井村（現美山町知井地区）といえば、京都大学農学部演習林として知られる広大な芦生の森、あるいは重要伝統的建造物群保存地区に指定された茅葺き民家集落・北村などによって、近年、マスコミにもしばしば取り上げられるようになった、丹波山地の奥深い山里である。この知井村にとって初めての本格的な通史書が刊行された。題して『京都・美山町 知井村史』、B5判で三百頁を超える大冊である。

しかし、旧村を単位とすることからも窺われるように、本書は通例の地方自治体史ではない。本書は旧知井村を母胎とする知井自治会が自ら企画し、自らの手によって作成した書物であるところに、かけがえのない意義がある。

本書刊行の経緯は、知井村史編集委員長である中野文平氏の序文に詳しいが、そのなかで中野氏は「今日、地域のおかれている危機的な状況は、固有の風土と社会の中で積み重ねてきた先人の知恵から学ぶことをないがしろにしてきたがゆえに、変動の激しい現代を確乎とした視点から見据えて行動に移す度量を持ち得なかったことにこそ、原因があったようにも思われる」と、本書刊行のきっかけとなった危機感について語っている。村史刊行委員会結成以来、本書刊行まで十年の歳月が経過したというが、この間、実際に上述の茅葺き民家集落・北村の伝建指定（平成五年）へのプロセスと美山民俗資料館開設など、地域の歴史文化を全国に発信し後世に伝える「行動」が並行していたのであり、本書刊行もそうした大きな「行動」の一環をなすものといえる。

本書は、史料収集、解説、分析から記述に至るまで、いわゆる専門家にこれらを委託するのではなく、地域住民が自らの手で成し遂げたものである。しかも、ここに用いられた史料の多くは初めて紹介されるものであり、その豊かさには驚きを禁じ得ない。14～16世紀の書き込みをもつ「智伊村大般若経」や、近世山村生活の諸相を伝える佐々里区有文書など、今後の山村研究にとって重要な史料群がペールを脱いだ。しかも、史料は丹念に分析されており、近世の章に盛り込まれた人口動態・家族形態に関するデータはまさに圧巻といつてよい。こうした新史料を駆使して、実証的に通史が叙述されているのだが、その語り口は平易で、地域住民にもわかりやすく面白く読めるように、ストーリーをもった楽しい読み物に仕上げられているのも本書の重要な特色である。

本書によって明らかにされた事実は枚挙にいとまないが、筆者の関心からすれば「知井の十名」の問題が大変興味深い。この地域では現在も「名（苗）」の組織が生きており、藩政村とは異なる社会集団として機能しているが、本書では中世に起源をもつ名の歴史的な変容や、藩政村を越える家々の結びつきのあり方、また名による山林所有の実態などが解き明かされており、中国山地の山村における村と「名」との関連を考察するための重要な事例となるだろう。また、近世における山の生業や近代以降の林業の実態についての詳しい叙述も、山村研究にとって重要な事例となるに違いない。さらに芦生の京大演習林問題などでは、単なる通史を越えて、当時の村の決断の背景や期待、